

A 4 7 / 0 2

国際交流と複言語教育の推進

山 崎 吉 朗 (日本私学教育研究所専任研究員)

抄録

本年の研究活動は、標題をテーマにして、1. 国際交流教育の推進 2. 複言語教育の推進 3. eラーニング教育の推進の3点についての研究を行った。本報告では、研究活動全体が俯瞰できるようにした。

◎ **Key Words** eラーニング、国際交流、複言語教育、多言語教育、語学教育

1. 国際交流教育の推進

1.1 日仏高校ネットワーク Colibri

2002年暮れのフランス大使館での初会合以来8年が過ぎ、9年目に入りました。少し過去を振り返ってみます。

紆余曲折を経た後に、フランスへの最初の長期留学が成立したのは3年後の2005年です。翌2006年にはフランスからの長期留学が実現して双方向の成立となりました。同じ年の秋にはフランスから日本への短期留学も始まり、翌年3月に逆も実施され、今のサイクルが出来上がりました。すでに通算300名余りの交流が実現して来ました。創設者の一人としてはたいへん感慨深いものがあります。

さて、今年はいくまでの年と大きく違うことが3点あり、Colibri にとって変革の年となりました。その3点について述べます。

まず、今回の第4回目の報告集はこれまでの報告集とは異なります。新型インフルエンザの影響で、2009年秋の、フランスから日本への短期留学が中止になり（フランス政府の意向です）、留学のサイクルが変更されたからです。日本人の生徒達が先にフランスに行って秋にフランスからの生徒を迎えることになったのです。例外的な措置です。このような異常事態にもかかわらず、生徒達の熱い情熱で第4回目の短期留学が実施され、そしてこの報告集が出来上がりました。その意味では記念すべき号と言えるでしょう。

2点目です。昨年（2010年）の3月に初代代表で現在の Colibri を作り上げた橋木氏が暁星高校を退職されてフランス甲南学園トゥレーヌ高等部に移り、Colibri の代表が交代しました。無理なお願いを聞き入れて頂き、大槻氏に新代表をお引き受け頂きました。新しく就任した大槻氏は、卓越した指導力と常に前進する辣腕ぶりで、Colibri を牽引しています。この大役をお引き受け頂いた大槻氏に心から感謝申し上げます。さらに、橋木氏はフランスに居を移すことで代表を退いた“だけ”です。Colibri の為にご尽力頂く点

は変わりません。むしろ今まではかゆいところに手の届かない感じでもどかしい思いをしていたフランス側との連絡が橋木氏のおかげでスムーズになると思われまます。ここまで Colibri を作り上げて頂いたことに感謝すると同時にこれからのさらなる協力を期待します。話が少しそれますが、昨年橋木氏の送別会を Colibri のメンバーを中心に行いました。借り切った店の定員をオーバーする25人の参加がありました。橋木氏のフランス語教育、Colibri への情熱がみなさんの共感を得て、橋木氏に感謝したい教員が集まり、この盛大な送別会になったのだと思います。さらに言うところからの Colibri への協力への期待も絶大だといふことができます。

さらには Maxime Pierre 氏にも感謝しないといけません。2009年9月に Rochard 氏の後を引き継いだ Maxime Pierre 氏は、大槻氏に負けず劣らず、迅速な行動力、優れた決断力で、懸案であった Colibri の冊子を作り、学会はじめさまざまな場で Colibri の存在をアピールするなど、Colibri の活動を円滑にして Colibri 発展の中心的存在となっています。

3点目です。資金についての報告が2点あります。一つは FIPF 第9回世界大会記念事業委員会から寄付を頂き、“コリブリ基金”を設置することができたことです。もう一点は現在準備中ですが、広くフランス語教育関係者に寄付を募る組織の構築です。

1点目はすでに昨年（2010年）の8月に口座を作成して入金されています。本来ボランティアというのは全くの無償というのではないはずなのですが、現在の Colibri は無償どころか担当者が自腹を切って運営に当たっています。今回橋木氏が詳細に書かれている通りです。それが少しでも解消されればと考えています。さらに、もしも非常事態が生じた場合にそこから運用できます。これまではそのような資金の余裕はない未成熟な組織でした。非常事態への対応は組織の危機管理として重要です。その意味で Colibri も組織として一つ前進したということが出来るかと思えます。

3点目は東大名譽教授の加藤晴久先生の発案で、2011年4月から動き出せるように準備を進めています。次年度にはよい報告ができると考えています。

なお、両方共に筆者が資金管理の責任者となっていますことを申し添えます。

次年度の報告集に掲載されることとなりますが、今年度（2010年度）は50組が成立し、日仏合わせての生徒数が初の三桁、100名となる大きな交流になりました。記念すべき三桁です。次年度は今年度とはまた違った意味で記念すべき報告集となるでしょう。

（拙稿「日仏高校交流ネットワーク“コリブリ”報告」より）

1.2 British Council CCEA プロジェクト

昨年に引き続き、今年もこのような立派な報告集ができあがり、慶應女子高校の馬場先生のご尽力にたいへん感謝致します。活動の中心になった生徒諸君、先生方にも敬意を表します。

CCAD から CCEA と名前を変えてきた Connecting Classrooms という British Council のプロジェクトですが、我々の東京私学グループとしては、この3月で一つの区切りとなりました。電子会議を進めてきた“まなば（朝日ネット）”は継続させたものの、大きな助成金などの援助はない中で活動を続け、あくまで生徒、教員の自主的な参加で活動してきました。最終的に今年の成果としてこのような立派な報告集を完成させることができたのはひとえに、馬場先生と参加した生徒諸君達の熱意と高い能力によるものだと改めて感じます。

British Council から日本私学教育研究所にこのプロジェクトが持ち込まれたのは2008年の7月です。すぐに馬場先生にリーダーをお引き受け頂き、参加校を集め始めました。秋の教員の会合、生徒の会合、そして、台湾での、まるでお見合いのような交流都市選び、“まなば”の利用と、プロジェクト当初の流れは極めて順調に進んでいきました。生徒諸君の能力の高さも驚くべきもので、慶應女子高校の徳丸さんというスーパー女子高生が全体を取り仕切り、昨年のレポートはとて高水準のレベルとは思えない、高い水準のものとなりました。東京私学グループ間の交流、共同作業という点では申し分のない動きであったと思います。

ところが、

このような国際交流のプロジェクトの場合、著者自身の経験から、失敗する要因は次の3点だと言う事ができます。

- 1 全体を取り仕切るところがない
- 2 相手の学校と直接のコンタクトがない
- 3 目指す目標がない

このプロジェクトはそれをすべて満たしていました。全体は馬場先生が取り仕切り、生徒側は徳丸さんが見事に取り仕切っていました。British Council も全面的に協力してくれていました。相手の学校とも台北、ベルファスト（馬場先生が訪問）で先生方と直接話合い、

交流しました。Connecting Classrooms という大目標を掲げてみんなが努力を重ねて来ました。

しかし、生徒同士の国際交流という意味ではいささか不完全燃焼のままとなりました。

唯一考えられる負の要因は年齢差位しかありません。台北もベルファストも中学が中心でした。これは最初に企画した私に責任があるのかもしれませんが、英語でのやりとりなのでかなりレベルの高い高校生でないといけないと考えたことが、相手校に重圧を与えたのかもしれませんが。一言で言うと、今回集まった東京私学のメンバーがあまりにも優秀すぎたということなのかもしれません。プロジェクトが始まった最初の頃に、東京私学のグループが論文のような英語のレポートを書いて相手校に送り、相手校が仰天したという話を伝え聞きました。もちろんそれで交流をやめようと思った訳ではないのですが、環境や宇宙などの話題を巡ってあまりにも高尚な話が続けるのについてこれなかったという事はあるかもしれません。

素晴らしいのは、このように CCEA の企画としては不完全燃焼で終わったにもかかわらず、そのまま鎮火してしまうのではなく、新たに火をくべて新しい燃焼を目指したということです。現在は3校が中心になっていますが、学校を超えて集まり、企画を立てるとするのは高校生にとって簡単なことではありません。この報告集は彼らの力の証だと言えるでしょう。

彼らの視線は未来に向いています。来年こそはこの活力が真の国際交流につながると信じていますし、教員団も新しい道を探っていきたいと思っています。

最後にもう一度、ここまで全体を牽引して来て下さった馬場先生に感謝の意を表して終わりたいと思います。

（拙稿 「国際交流報告集」慶應義塾大学より）

2. 複言語教育

大きく進んだ一年となった。複言語教育研究会の業績について列挙しておく。

1. 「いかに21世紀複言語能力を育てるか（朝日出版社）」に3名が寄稿。
2. 日本言語政策学会春季大会において筆者がパネラーとして招聘
3. 筑波大学シンポジウムに研究会メンバー全員が招聘、またその報告集への寄稿
4. 日本外国語教育改善協会大会に3名がパネラーとして招聘
5. 複言語教育研究会の成果をまとめ、研究会のメンバーを中心に、「多言語・複言語教育研究 No1」を刊行

特に最後の研究会誌は以前本研究所で出した調査資料集 No243、244の「中等教育における英語以外の外国語教育」、「キャリアデザインにつながる多言語教育」を引き継いだものである。この2冊は多言語教育関係の論文や学会発表で引用されている貴重な論文集となっている。しかし、最後の「キャリアデザインにつな

がる多言語教育」から3年が経った。調査資料集という形では、毎年言語教育を扱う訳にはいかない。そこで、せつかくの研究会の成果を毎年報告したいと考え、刊行したものである。次年度以降の刊行は資金面で不透明であるが、工夫して継続して発刊していきたいと考えている。

上記の成果の中から、日本外国語教育改善協議大会のレジュメを掲載しておく。現在中等教育における複言語教育についての現状を概況している。

2.1 日本外国語教育改善協議大会のレジュメ

中等教育における英語以外の語学教育の現状について、昨年(2010年)春までの現状については、「いかに21世紀の複言語能力を育てるか(朝日出版社)」に記した。今回の発表はその原稿を元に新しいデータを加えてまとめる。扱う内容は次の点である。

1. 概況 2. 大学入試センター試験について 3. 今後

概況

隔年の文科省調査による、最新の「英語以外の外国語の開設」は、昨年(2010年)の1月に発表され、webに掲載された。調査自体は2009年の6月である。掲載されているのは、「平成20年度高等学校等における国際交流等の状況について(文部科学省初等中等教育局国際教育課)の中で、その最後に「英語以外の外国語の開設」が掲載されており、たいへん探しにくい。「国際交流等」の「等」に入るのは違和感があるが、とりあえず、おまけのようにデータが示されている。下記がそのurlである。最後に参考資料として「Fig.1 開設学校数の推移」を載せておく。

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/01/_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1289270_1_1.pdf

統計を取り始めた平成5年(1993年)以降、ずっと右肩上がりです上昇してきたのが、今回は残念ながら減少した。公立高校は、1403校から1455校に4%上昇したのだが、私立高校は、639校から572校に10%も減少し、全体としては2042校から2027校へと、1%減少した。ただ、これまでの全体増加率の平均が10%少なかったのに対し、前回の調査(平成17年調査)のみ、全体増加率が約51%で、平均の1.5倍だったことから考えると、今年の調査で下がったというより、前回の大幅な増加を維持したととらえるのが妥当であろう。

実は、前回の調査の時は未履修問題が大きな話題になっていた時期で¹⁾、年によっては開設されていない学校も、カリキュラムに載せてある科目はすべて提出したのではないかと、関係者の間では言われていた。

大学入試センター試験

大学入試センター試験(以下センター試験)の受験人数や平均点について記しておく。最後にTable1 各言語の平均点の一覧表を載せておく。

現在、センター試験は事前に登録しておけば、英語

の代わりに、フランス語、ドイツ語、中国語、韓国語で受験することができる。ただ、たとえばフランス語を開設している学校が373校あるのに、昨年度(平成22年度)のフランス語受験者が165名というのはいかにも少ない。これは、第1外国語の設置校は10校に満たないからである²⁾。他の学校に設置されているのは第2外国語である。週に2時間を1年間、あるいは2年間学習しているだけではセンター試験のフランス語を受験するレベルには到底達しない。フランス語の場合は、基本的に第1外国語の学習者の受験者数ということになり、僅か165名の受験者ということになるのである。なお、「フランス語の場合は」と限定したのは、大学入試センターの外国語科目である、フランス語、ドイツ語、中国語、韓国語の事情は一律ではなく、言語によって異なる。フランス語、ドイツ語は基本的に学習者が受験するが、中国語、韓国語の場合、学習者はほとんど受験しない。特に韓国語では、学習者の受験はほぼゼロで、いわゆるネイティブが受験し、ネイティブに対応するような試験になっていると関係者からは聞いている。

センター試験の理科や社会では、平均点の調整が行われ、毎年その格差が新聞紙上を賑わす。たとえば、日本史と世界史の選択者の間で、あるいは物理と化学の選択者の間で、有利不利が出てはいけないというのが基本的な考えである。「平均点主義」と言ってもいい、その考えは、外国語にも及び、英語の平均点に合わせるように、問題作成者には圧力がかかっていると聞いている。前述のように、フランス語、ドイツ語の場合と、中国語、韓国語の場合は事情が異なるし、外国語以外の教科と一律に論ずるのは不毛であると感じるのは、私だけでないだろう。

今後について

このように言語によって一律に論じる事ができないところを考慮しながら、やはり複言語教育普及のためにはどの言語も協力することが不可欠である。前述のように、一昨年(2009年)には、国際シンポジウム「東アジアの中等教育におけるフランス語」を実施し、昨年(2010年)には、日本言語政策学会の第12回大会で、「複言語主義教育」とその政策—日本における展望」というシンポジウムを行い、筆者自身もパネリストとして参加した。いずれもヨーロッパ語、アジア言語が協力して実施した。

文科省への働きかけを始め、各学会が連携して今後も活動して、何とか現在の状況を改善していきたいと願っている。

2.2 フランス語教科書作成

これはこの冊子にある、カリタス女子高校の橋本悦子先生の委託研究と私の研究を合同して行っていたもので、紙幅もないので詳細はそちらを御覧頂ければと思う。フランス語の教科書の場合、大学生用のものしかないの

で、それを制作することを研究としているものである。

3. eラーニングの普及

2006年度から全国の高等学校、大学にeラーニング環境を提供し、実践を進めてきた。教材が少なく、非常勤が多い、英語以外の科目でのeラーニング利用は必要であり、有効であると考えたのである。本論文では、eラーニングの特質として挙げられている5つの要素、「インターネットによる教材配信」、「主体的な学習」、「学習目的に従ったコンテンツ」、「インタラクティブ」、「ブレンディッド・ラーニング」という観点から3つの事例を検証した。その結果、これらの事例が有効なeラーニングとして活用されており、逆にこの5つの要素はeラーニングの有効性を検証するときに重要であることがわかった。

(拙稿「CIEC 研究会論文集－多言語 e-Learning の普及と検証」より、抄録)

- 1) 学習指導要領で指定された必修教科・必修科目を受講させていないことが、2006年10月24日に富山県の富山県立高岡南高等学校で露見した。これを皮切りに、全国規模での未履修問題に発展した。
- 2) 私立5校(白百合、カリタス、雙葉、聖ドミニコ、暁星)、公立2校(埼玉県立伊奈総合、岩手県立不來方)

本年度研究業績一覧

- 1 書籍
いかに21世紀の複言語能力を育てるか、朝日出版社、2010
- 2 査読論文
多言語教員免許状更新講習の現状と問題点、外国語教育研究、第13号、2010
日仏高校交流ネットワーク“コリブリ”報告(3)－中等教育でのフランス語教育の発展を目指して－、フランス語教育、38号、2010
多言語eラーニングの実践と普及－複言語能力の育成－、CIEC 研究会論文集、2011
- 3 パネリスト
「複言語教育とその政策－日本における展望」、日本言語政策学会第12回大会、関西大学、2010
今大学に求められている外国語教育とは何か?－中等教育における多様な外国語教育の取り組みから見えてくるもの－、筑波大学外国語センター主催公開シンポジウム、筑波大学、2010
中等教育における複言語教育の現状、日本外国語教育改善協会大会、昭和女子大学付属小学校、2011
- 4 学会発表
多言語教育の e-Learning の推進と学習効果検証、日本フランス語フランス文学会春季大会(早稲田大学)、2010
多言語eラーニングの実践と普及、日本教育工学会全国大会(金城学院大学)、2010
中等教育における語学教育とヨーロッパ言語共通参照枠、日本フランス語教育学会秋季大会(京都大学)、2010
高等教育、中等教育における語学教育と CEFR、外国語教育学会全国大会(東京外国語大学)、2010
多言語 e-Learning の普及と検証、e-learning 教育学会、第9回研究大会(大阪大学)、2011

参考資料

Fig. 1 開設学校数の推移

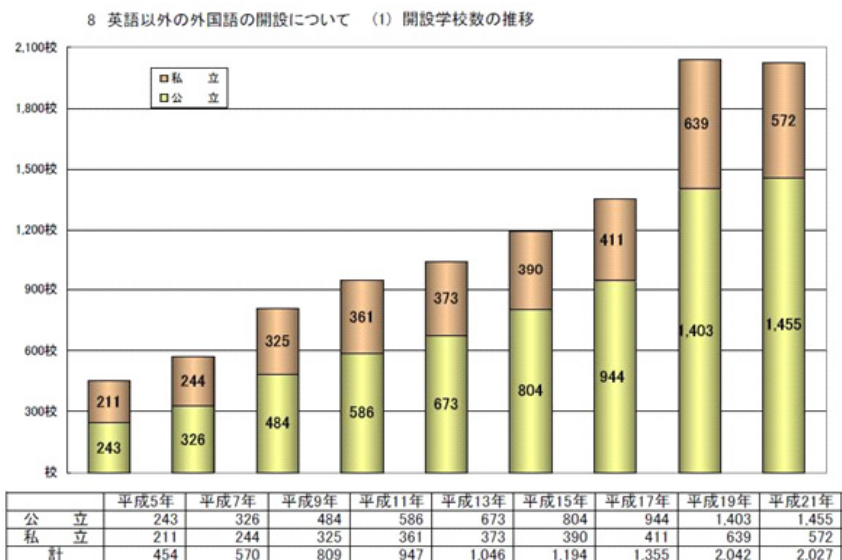


Table 1. センター試験での5言語の平均点推移

	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
英語	55.35	54.84	63.41	65.05	58.09	63.76	65.54	62.63	57.51	59.07	61.39
ドイツ語	59.33	51.07	55.49	71.28	66.55	77.92	71.3	67.59	76.77	75.06	71.08
フランス語	69.99	70.63	65.78	69.77	66	67.3	70.56	67.65	69.48	67.4	71.19
中国語	76.91	75.15	75.35	73.98	84.56	85.28	82.09	73.18	68.78	69.01	67.07
韓国語		82.7	85.48	76.82	79.06	77.64	73.77	71.76	83.88	74.98	79.94